

第5回青森県地方分権推進シンポジウム

トークセッション ～これからの地方分権に何が必要か～

月日：平成19年12月13日（木）

場所：青森国際ホテル 萬葉の間

進行：青山彰久氏（讀賣新聞東京本社編集委員）

参加者：日置真世氏（NPO法人地域生活支援ネットワークサロン
事務局代表・北海道）

久慈浩介氏（（社）カシオペア青年会議所理事長・岩手県）

是永幹夫氏（劇団わらび座代表・秋田県）

秋田佳紀氏（青森県企画政策部企画課総括主幹・青森県）

司会者

それでは、～これからの地方分権に何が必要か～をテーマにトークセッションを始めさせていただきます。

それでは御出演の方々を御紹介いたします。

コーディネーターは、先ほど基調講演をいただきました讀賣新聞東京本社編集委員の青山彰久様でございます。

続きましてパネリストの方々を御紹介いたします。

特定非営利活動法人、地域生活支援ネットワークサロン事務局代表、日置真世様でございます。北海道釧路市よりお越しいただきました。

社団法人カシオペア青年会議所理事長の久慈浩介様でございます。岩手県二戸市からお越しいただきました。

劇団わらび座代表の是永幹夫様でございます。秋田県仙北市からお越しいただきました。

青森県企画政策部企画課基本計画推進グループリーダー、秋田佳紀様でございます。

以上でございます。なお、御経歴につきましては皆様お手元のプログラムをどうぞ御覧ください。

それではこれからの進行はコーディネーターの青山様、お願いいたします。

青山氏

それでは引き続き、今度は各論に入りたいと思います。今日、4人の方、まさに非常にバラエティーに富んでいるパネリストを揃えていただきまして、基調は、自治体というのは国の出先機関ではありません、我々が作る地方政府だと、人々が作る地方政府だということとでいけるかなと思っています。

最初に、分権改革、地方分権という言葉からどんなイメージを浮かべているかということとを、自己紹介も兼ねて、ちょっと総論的になるかもしれませんがけれども1人3～4分程度で、日置さんからお話ししていただけますでしょうか。

日置氏

はい、トップバッターということで、私から話をします。

まず自己紹介ですが、プロフィールにも書いている通り、私は元々別に何かプロとしてやっていたわけではなく、強いて何のプロかと聞かれると、子育てのプロだったということです。自分の子どもが3人いますが、一番上の子どもが重度の障害を持っていて、障害児を育てる中で出逢った仲間達と色々な活動を地域でやっているという立場です。

パンフレットを、今日、皆さんの方にお配りをしているのですが、親の会の活動自体は私自身、94年から携わっていますが、98年に「みんなのゴキゲン子育て」というガイドブックの発行をして、次の年に地域のたまり場づくりを経まして、2000年に今のNPO法人を立ち上げて、その後地域のいろんなニーズを拾い上げて、お母さん達と地域の方達と地域の福祉事業を興していったという立場を持っています。それがこの5年ぐらいの間に、このパンフレットにあるようにどんどん事業が大きくなってしましまして、これは全く私の意図するところではなかったのですが、今現在はもうすごく大きなNPOになってしまって、働く人、職員がもう100名を超えるようなNPOになっています。これも、私自身は自分がやってきたという感覚は全然なくて、地域に必要なものをずっと追いかけていったらこういうふうになってしまったということが正直なところではあります。

そんな自分のバックグラウンドを考えながら、先ほど青山先生のお話を聞いていましたが、まさにこれは近接性の原理なんだと、私はすごく意味を付けられたなという感じがしました。私達のやっている事業は子育て支援だったり障害児者の支援だったりするのですが、まさに一番近い自分達がやるから一番意味のあるサービスが出来ているし、一番問題意識に近い私達がやるからこそこれだけ事業が広がっていったという実感を実感にしているの、理論で言う原理ではなく、それを自分達が証明をしたなと思いつつ聞いていました。

今日のテーマは地方分権です。ちょっと話がずれますが、最近ちょっとこういう場に出ることが増えてきましたが、いつも雰囲気と同じなんです。スーツの方が多いですよ。前も釧路で道州制のフォーラムをやった時にも、スーツの議論じゃ絶対ダメだと私は言ったのですが、地方分権で私の一番の実感、住民感覚と離れているギャップを一番最初に連想します。

でも、本当は違うと思うんですね。私は縁があって道州制推進道民会議という道庁の主催する会議の一員になった時に、初めて道州制ということが何かというのを知りました。それを知った時に、「元々目指しているのは私達のやっているNPOの活動だとか、当事者の活動と同じじゃないか。」と、その時初めて気付いたんですよ。そう考えた時に、どうしてこんなに理念的には一緒なのに、自分の地域に帰って周りの人と話した時に誰も道州制のことは知らないし、北海道で道州制特区を今進めていますけれども、それに関心のある人が誰もいない。このギャップは何なんだろうというのが一つ目です。それが一つの危機感として私は受け止めています。

もう一つ地方分権で感じることは、ギャップはあるんですけども、地域には可能性がたくさんあるなと思っています。それはいろんな活動を通していろんな地元の人と話した時に、方向性だとか、これから目指していく地域はこうならなきゃならないという話をした時には、大体意見が住民レベルでは一致するんですね。このままではいけないと、

何とかしなければならない。自分達の力で何とかしなければならないと思っている。最近、企業の方とも話をする場面が多くなったのですけれども、ちょっと前だと企業の方と福祉のフィールドで話をしても全くかみ合わないことが多かったのですけれども、最近はずごく目指すところが同じだねという話ができるようになったので、ギャップも感じると同時に可能性とか今後の方向性が少し見えてきたかなという印象でいるところです。

青山氏

日置さん、スーツのおじさん達とギャップが出る原因は何だと思います？

日置氏

一言で言うと、生きている世界・見えている世界が違うのかなと思いますが。

青山氏

なるほどね。分かりました。

久慈さん。

久慈氏

私は岩手県からやってまいりました。お隣の岩手県で南部美人という地酒を造っている5代目の蔵元です。地元で100年以上、ずっと地域に必要とされているからこそ続いてきた企業なのかなと思っております。ご当地、青森の田酒さん、ここには私の蔵で働いた者が杜氏として行っておりますし、西田社長は私の恩師でもございます。そういった意味で、今日は青森をすごく楽しみにしてまいりました。

今日は株式会社南部美人の専務という立場でもお話をしますが、青年会議所、青森にも青森青年会議所というものがございまして、日本全国に七百数十の青年会議所があり、この青年会議所というのは20歳から40歳までの人しか入ることができない明るい豊かな町づくりをしていく習練・奉仕・友情を三信条とした団体でございます。全く自分達持ち出しのお金で、地域をどうすれば明るく豊かな社会にしていくかということを考えて日々活動をしている団体でございます。青森のねぶたのお祭りも青年会議所主導で始まったと聞いておりますので、そういった意味では地域に無くてはならない団体ではないのかなと思っております。

私は、今年理事長という立場で様々な事業をさせていただきまして、それについては皆様の方に御紹介が載っておりますので見ていただければいいのですが、地方分権というところのイメージということなんですけれども、これは本当に一住民の我々としては、振っている旗の旗先が見えていない。分権をするのはいいのですけれども、きつい言葉で言わせていただくと、例えば岩手県だったら、借金が非常に多くて、収入も自分達で稼いだ収入が20%程度しかないのに、80%は借金、補助金、いわゆる働いていないのに入ってくる、僕ら企業から言わせれば全然関係のない金ですよ、そういったもので動いている方々が言っている、あまり意味が分からないよと、厳しい言い方をさせていただくとそうなんです。

同じ会社に例えると、例えば収入1億円の80%、売上げ1億円の80%がそういう補助

金的なお金であるならば、その言いなりになってしまうのは当然ですよ。銀行だったら銀行の言うことを聞かなければいけない。

そういったものの中で、いかに民間とのギャップの差というのがあるのかなということを感じています。すごく感じています。

大体にして、私は今、自分のお酒を世界に売ってしまっていて、年に十数回海外出張をしております。アメリカにもしょっちゅう行っていますが、地方分権って本当に言うならば、道州制とかそんなことももちろんそうですけれども、合衆国制みたいに、あのぐらいルールも違う、法律も違う、下手なことをするとここの州からここの州に酒は送れないんですよ、宅急便で送ることが出来ないとか、そのぐらいまで。大統領もそうだけれども、大統領よりも州知事の力が圧倒的に強いとか。そのぐらい、ある程度本当にそこに任せる、地方分権をしていくなれば権利も任せるけれども歳入もちゃんとやれよというところまでやっていかないといけないのではないのかなと思います。権利ばかり言っているような気がするんですね。権利の行使というのは、権利に伴う自分達のリスクも背負わなくてはならない。そういったところまでメリット・デメリットをきちっとはっきりして住民に説明をしないといけないんですね。

僕が見ている、今日は行政の方が多いのでしょうかけれども、行政は情報を発信していると言うけれども、発信していると言っているのは自分で発信をしているだけで、目に届いていなければ情報じゃないんですね。そういったところまでちゃんと考えていただければなと思っています。

あと青山さんもいるからマスコミにも一言なんですけれども、私、9・11のテロの時にニューヨークにいました。9・11のテロの時、日本の報道は皆アルカイダのものだと話しましたね。誰一人、アメリカが自分達で自作自演をしたと報道をしたところはないですよ。アメリカでは2分ですから、その話が。そういうふうな言論の自由も含めて、いろんな国を見て歩くと、単一民族で構築されているこの国で、やはり中央に集権されて動かされているいい面もあるのだけれども、悪い面もどんどん発信していかないと、本当に地方分権ってどういうものなのというのが我々住民、もっと言うと税金を払っている我々住民の目線に届くようなものをちゃんと作らないといけないのではないのかなと思っています。

青山氏

なかなか、厳しい、迫力のあるお話で、多分、久慈さん、私の言葉で言えば、自分のお金を使う時が一番賢く使う、人の金を使うといい加減に使うということでもありますね。

久慈氏

全くもってその通りでしょう。親からもらったお小遣いは自由に使うけれども、自分で稼いでもらった給料は本当に堅実に使うでしょう。それと一緒にですよ。

青山氏

自立する、自ら立つということと自分達を律するという、両方あるんですよ。

久慈氏

自立するというのは権利の行使だけをしゃべるのではなく、それに伴うリスクをいかに背負うか。企業だったら倒産、社員の生活の保障、そういったものを全てを追うリスクを背負って初めて言う権利、これが自立だと私は思っています。

青山氏

なるほどね。分かりました。

是永さん。

是永氏

私は、今でこそわらび座の代表ですが、33年前に劇団の入団テストを受けて、全部門落ちた人間です。入団以来、マネージメント関係のセクションで仕事をしてきました。株式会社わらび座としては、正社員・契約社員・パート合わせて380名で、6割が地元農家の母さんを中心に働いております。地場企業としての性格もあります。劇団部門の人間の中でソーラン節を踊れないというのは私一人ぐらいで、何でそういう人間がわらび座を三十何年も離れずにやっているのかと一言を少し話したいと思います。

私の出身地は九州の大分市で、自宅も今、大分市に構えています。90歳になるお袋の面倒を見るためということもありますが、自宅のある大分市から秋田の会社に単身赴任をしている形です。

大分という所は南の国ですけど、人間の中には北方性に憧れる気持ちと、南方性に憧れる気持ちとの両面あると思います。私は元々沖縄が大好きで、特に先島が大好きで、文化庁の補助金をいただける時に沖縄本島や先島で3年に1回ぐらいは公演を今でもやらせてもらっていますけれども、自分が南の人間だったので、北方に憧れたわけです。まず何と言っても早池峰神楽が大好きで、宮沢賢治が大好きでというような。高校時代にソノシートで聞いた秋田弁の響きにも非常にひかれるものがあって、そういうものがミックスされた地域として秋田の劇団を選びました。

北川正恭さんが三重県の知事時代に随分お世話になって、熊野古道世界遺産の3年前に、スローライフの考えで全国の小学生に紀伊半島の芸能を使って舞台作品を創ってくれないかという県からの依頼があり、県議会でもかなりの予算を通していただいて、三重県内は丘の上の分校まで、4トントラックが入れない所まで、県内のほとんどの小学校で公演をしました。その時に、県庁でたびたび教わったのは、県行政の大方針は「生活者起点」、この漢字五文字の言葉で県庁内から全ての意識を変えていくという行政担当者の姿勢でした。道半ばで北川さんも知事をお辞めになって、今は別の形でまたいろいろとご縁があるのですけれども、やっぱり行政と生活者、私達もそうですけれども、市民の連携の中で地方分権というか、広域連携も含めて見えてくるのではないのかなと思います。

私自身は80年代後半に、第三セクター、市民セクターの形成に関心があり、イタリアはコーペラティブな市民セクター、第三セクターのことを5名の研究者の方々に数年がかりで調査していただき、劇団の月刊誌に数年間連載していただきました。

90年代に入って、3ヵ年連続調査交流で劇団幹部をUSAのNPO調査交流に派遣し、大きな収穫を得ました。USA 全国、東から西まで、その中で今全米最大の舞台フェステ

イバル集客を誇る人口2万のアシュランドの「オレゴン・シェークスピア・フェスティバル」とも出会いました。年間シーズン 45 万人のお客さんを集めている、この小さな町との文化交流をもう 10 数年来しています。

今、一番関心があるのはドイツの州政府の「文化の力」입니다。地域文化という視点で考えた場合に、ドイツの州が持っている地域文化の発信の仕方というものを詳しく知りたいという要求があります。海外にどういう具体的事例があるのかということを見ながら、たざわこ芸術村や我々劇団の将来を考えていきたいと思っています。

地方分権もどんどん進めてほしいし、広域連携という点では、九州観光推進機構や今年立ち上がった東北観光推進機構、それから中部広域観光推進協議会など広域での観光推進が勢いよく始まっています。九州・東北・中部の3ブロックでそれぞれ今、劇団の舞台作品でお世話になっております。ここ地元・青森の皆さんにはミュージカル「棟方志功」で大変お世話になり、県民の皆さん、6万7千人の方に集中的に見ていただいたということで、ありがとうございました。

青山氏

また、是永さんには、自分達の住んでいる町というのはどういう価値を持っているかを考える機会がないと考えるものですが、是永さんはあちこち、他の国から北東北を考えるとというご経験もあると思います。

秋田さん、3人から猛攻撃を受けている感じがしないのもないので、全部答弁しろとは言いませんが、お願いします。

秋田氏

青森県庁の秋田でございます。

私が今日、この場におりますのは、おそらく青森県の秋田という名前がどこか広域連携を感じさせる、そういう名前のお陰ではないかと思っております。

私の自己紹介ですが、青森県で生まれまして、学生時代はやはり都会に憧れて東京に行って、東京の暮らしを楽しんで、卒業後は青森県庁に入ったということでございます。

県庁では、平成2年、ちょうどふるさと創生時代のころから市町村振興、地域づくりの関係の仕事を担当して、その後、平成11年8月から15年3月まで3年8ヶ月、今は五戸町と合併をした旧倉石村に助役として行きまして、市町村行政の現場にありました。従って、この間、20世紀末から21世紀にかけてふるさと創生から市町村合併、あるいは三位一体の改革と、非常に激動の地方自治の変化を体験してきたところです。今日お集まりの市町村の方々も、そういう体験をされている方がいらっしゃると思っております。

個人的なこだわり、特に公務員だからということではなくて地域で仕事をする者としてのこだわりとしては、全国的に共感の輪が広がるようなものを、やはり地域からやっていきたいということがあります。正直なところ、東京から必ずしも戻ってきたくて戻ってきたというわけでもないのですが、やはり地方にいても全国的なことをやってやろうという思いはあります。

例えば、去年まで観光の仕事をしていたのですが、観光のガイドブックというものも企画的には、全国的に同じ企画の中で青森県版があったり、岩手県版があったり、北海道版が

あたりという状況です。テレビ番組もそうだと思うのですが、中央の企画でもって地方の材料を取上げるということが多いかと思います。それが必ずしも悪いとは言いませんし、いい企画もあるとは思いますが、やはり地域の企画で地域の魅力を出していくようなことをしたい、そういう気概は持っていました。お手元の資料にあります「サーベイ青森」という出版は、そういう思いで、企画を地域から持込んで、それを地域出版としてやるのではなくて全国出版してやろうという思いで東京の出版社のパートナー探しに行きました。最初は本当にパートナーが見つかるのか不安なところはあったのですが、幸い大手の出版社が賛同してくれまして、コラボレート出版という、自費出版ではなくて企画や編集は地元で行って、製作とその経費の回収、そういったものは出版社が担当していただくという形で出版が叶いました。今年の5月に第2版、赤い表紙の方が初版ですけれども改訂版が今年の5月に出ているところです。それ以外に、裏のページで地域発の企画ということで、ながいも料理の本ですとか、あるいは、今は売られていないのですけれども新幹線が八戸開業した時に倉石牛の駅弁を手がけたり、そういったことをやってきました。

それで、地方分権という言葉については、よく地方主権という言葉を使う方もいらっしゃいますけれども、かつて私はそんなにそれに神経質になることはないと思っていたのですが、やはり骨太の方針が出されてからは、いや、そうも言っていられないなという感じがしています。

この5年ほどの改革を見ると、地方主権とか地方主義といった理念の転換がないままに、国・地方の財政再建の問題を市場原理の導入により解決しようという方法論で進められてきたように思います。先ほどの青山さんの分類で言えば、小さな政府派という流れがやはり強かったということは、地方にいるものは誰も感じているところではないかと思っております。

また、3県連携を進めていることについては、それを進める前は、やはり地方にいる人間もどちらかと言うと東京を見ていて、研修でも東京に行ったり、これは役所だけではなくて企業でもそうだと思うのですけれども、地銀から都銀に研修に行ったりとか、そういうパターンが多かったと思います。逆に身近な隣近所の県の方と交流をして、あるいは研修でも行ったりとかで交わることによって、お互いの資源、あるいは人材とか、そういったものの力を再確認できますし、東京で得られる刺激とはまた違った形で、地域の者同士が一緒になってできるパワーというものも感じている次第でございます。

まず以上でございます。

青山氏

ありがとうございました。

バラエティーに富んだメンバーです。それで、地方分権を進めるのに本当に必要な要素って一体何だろうかということのを少し考えてみたいと思うのですけれども。久慈さんにまず最初にお聞きしたいのですけれども、久慈さんは非常に先ほど厳しい御指摘をされて、確かに言ってみると、我々サラリーマンは給料をもらうと、明細を見ますと、住民税と所得税とほぼ均等に払っているわけですね。ついつい地方自治体の人達と話すと、まるで全部地方自治体だけに税を払っているように見えますけれども、我々は国と地方と両方にお金を払っているわけですね。その税金に見合う形の政府になっているのか、ど

うなのかとずっと気になっているところなんです。

そこで、久慈さんは一体今の行政というのはどっちを向いているのか、あるいは住民はどう考えているのかというのをどういうふうに考えておられるかということの切り口にしながらか分権改革の本当に必要なものは何かをお話いただけますか。

久慈氏

分権改革に本当に必要なのは、「自分達が住んでいる地域をどういうふうにしていくの？ どうしたら良くなるの？」ということ、行政だけが考えるのではないし住民だけが考えるのではないし、対等な立場で同じように考えていくことが大事だと思うんですね。さっきは厳しく言いましたけれど、俺はもっと悪いのは住民だと思うんだよね。だって、何かその辺、自分の家の前の塀が壊れたから二戸の市役所に電話をして、「塀が壊れています。直しに来てよ、土木課」というふうにするわけでしょう。例えば、二戸祭りというお祭りがありますけれども、これは市がやっているお祭りでも何でもないんだけど、事務局を二戸市役所の職員がやっているから、二戸のお祭りの何か文句があると市役所に文句を言う。それ、違うでしょう。住民が住民でやっているものに対して、何か不手際・不都合があった時ばかり行政に文句を言う。例えば、雪だってそうですよね。除雪だってそうですし。全部、何か文句があると住民は全て行政に文句を言う。これも権利の不当行使だと私は思っているんです。確かに私達の税金で皆さんは暮らしています。私達の税金でご飯を食べています。だけど、それは税金を払っているから自由に何でもできるという考え方とはつながらないと思うんですね。

もう一つ、そういうのも多いのですが、行政側も、私こういうことをよく言うのですけれども、岩手でも講演をした時に言うのですけれども、特に行政の皆さんに言うのですけれども、「皆さんは株式会社青森県の社員でございます。営業項目はただ一つ、サービスです。対象は青森県民。」たったこれだけの会社なんですね。たったそれだけのもので、サービスというのどういうふうなことを考えていくかということの本気で議論していただくためには、サービスを良くするためにはその町をどうしたら本当に良くなれるか、そういうことをしっかりと考えていかなければいけないと思っているんですね。

今日、新卒の方がいっぱいいるんでしょう？ 新入社員とか新入職員ですか？ 我々二戸市では一番の大企業は十文字チキンカンパニーという 300 億円の企業がありますけれども、3万人の街で二戸市役所は上から数えて何番目かの大企業でございますよ。いい就職先です。私の同期は 10 人ぐらいいます。そういった意味でも、本当に市役所・県庁に就職した本当の目的というのは、この町、住んでいるところをよくしたい、何とかしたいという思いで入っていると思うのですが、それがどんどん目の前の机上の空論に汚されていって、それがどんどんずれていく。それが住民意識と僕らの行政意識の違いだと思うんです。それを是正しようということで、実は二戸地方振興局の局長、これは、実は二戸地方振興局は 70 % が盛岡から通っているんですね。盛岡から二戸まで新幹線で 20 分。朝は臨時列車が出ていますので通勤圏内です。盛岡から通っている人が多いということ、今の局長が嘆いて、今年二戸地方振興局長主催で私の蔵で住民と二戸地方振興局の局員の交流会という飲み会をやりました。何と、局の中でも初めて知り合った人がいるんだよね、ありえない。僕らの世界ではありえない。そのぐらい意識が違う、形が違う。それを一緒になって

やって、まとまってこの町をどうやっていくんだということを考えるのが地方分権、改革に必要だと思うんです。行政は行政、民間は民間ではなくて、一緒になっていいことも悪いことも考えていこうということを本気でやっていかなければいけないのではないかなと思っております。

だから、民間も住民も権利の行使、権利は義務を負って一緒に行使しなければいけない。行政も一緒になって、上からものを見るとか、そうは思っていないかもしれないけれどそう見るのではなく、一緒になってやっていこうじゃないかというところが一番大事ではないかなあと考えております。

青山氏

なかなか的確な御指摘で。

私もよく地域の人達と話す時に、青森はどうなのか分かりませんが、これだけ財政が逼迫してくると、私の言葉で言うと公共サービスの撤退競争を今都道府県も市町村もしている傾向があって、そこに悪いことに住民との協働というのを適当に解釈して、住民に丸投げというふうに解釈をする役場がないわけじゃないんですよね。今の蔵の中の話、まさに協働というのはそのとおり協働なんですよね。丸投げじゃないんですよね。

久慈氏

一緒になって考えることなんですよね。そして、一緒になってやっていこうという言葉だけじゃなくて、やっぱりお酌を酌み交わすことというのは日本のいい文化です。アメリカ人にはこれはありませんから、びっくりしますから、来た時に。お酌をする、して歩くなんていうのは本当にはないんですけれども、そういった日本のいい文化を交えながら、その地域の特産物を食べ、知りながらいろんな話をしていく。そうしたら話す内容はたった一つですよ。どうすれば二戸をよくできるか、たったこれだけだから。そういうことを本気でやっていかないとダメなんです。絶対ダメだと思う。

青山氏

分かりました。じゃあ、是永さん、どうでしょうね、今までの地域文化をずっと手がけてこられたお立場から見ると、この分権改革に本当に必要なものを煎じ詰めて言えば何だということになるでしょうか。

是永氏

やはり正道は、地域の資源を徹底的に掘り下げていくことではないでしょうか。秋田空港は週3便韓国仁川との定期便があって、今年も韓国の386世代の次の、平均年齢35歳の韓国全国の演劇プロデューサーの皆さんが大挙、二泊三日連泊で「たざわこ芸術村」に視察交流で幾度もお見えになりました。秋にはわらび座修学旅行と同じメニューで京畿道文化財団のご一行23名が視察交流でお見えになりました。

韓国とは文化芸術交流を20年近く続けていますが、とくに釜山韓日文化交流協会の皆様方は、毎年15名ずつ3泊4日で10年間継続してお見えになり、釜山の郊外に「たざわこ芸術村」のようなアートヴィレッジを創りたいとの想いを強くお持ちです。

私達わらび座が、劇団だけのみで秋田に居たら「たざわこ芸術村」は誕生しなかったでしょうし、逆に劇団の維持も困難になっていたのではないかと思います。地域資源を徹底的にポーリングし、地域資源を経営資源にするシステムをそれこそ何十年もかかって創ってきたから今日の姿があると思います。東京の真似をしてもしょうがないし、真似をできる体力もありませんし、東京では出来ないことが北東北にはいっぱいあります。井上ひさし先生が昔からおっしゃっている、「どの町もどの土地も地球のへそなんだ」と。これは楽観的過ぎるかもしれませんが、やはり掲げるべきミッションだなという想いがあります。地域資源というと、観光資源であったり自然資源であったり郷土料理の魅力だったり人の魅力だったり、様々な複合体ですけれども、やっぱり地域資源を経営資源にしていく歩みの中で創造してきた芸術村だと思います。東京にはないものを求めて韓国から盛んに視察に来る時代です。各県の県議会の視察も年々増えてきています。東京で出来ないことを、別に東京と競争するつもりは全くないのですけれども、やっぱり地域の資源をどこまできちんと見ていくかというのが分権の場合にかなり大事な要素ではないかなと思います。

青山氏

特に、北東北というのは、さっき先島諸島の話もされましたけれども、北東北の魅力、地域資源の点での魅力、北東北のオリジナリティー、どこにも負けない北東北の価値というのは何なんですかね。

是永氏

これは、私達の劇団が個別にそう思っているというよりも、かなり広範囲の検証済みのことなんですけど、ヤポネシアと言うか、日本列島の文化を考えた場合には、特段に魅力的な圏域は、北東北、たまたま今3県、青森県・岩手県・秋田県という県ですけれども、東北北部とそれから南西諸島、沖縄・奄美ですね。これは音楽性とか舞踊性において格段の魅力がある地域です。沖縄は、続々とミュージシャンを産み出し、琉球舞踊含めて民族的な舞踊が特段に盛んな地域です。かたや北東北は、それこそ神楽の総元締め早池峰神楽、鬼剣舞や鹿踊り、黒石のよされ、八戸のやんぶり、津軽三味線、秋田の優美な盆踊り、などなどきりがなくあるんですね。

来年からある大手の教科書出版社と、小中高の先生方に北東北の芸能を体感してもらいながら日本の伝統的な踊りを覚えていく研修企画をスタートさせますが、北東北はそれくらい魅力のある地域だと思います。

青山氏

足許を掘ればそこから泉が湧くというキャッチフレーズですよ。

私、いつも気になっていたのが、今度の新年度の予算の中にも増田ビジョンというので、私は増田さんと随分付き合いは長いのですが、ちょっとムカッとしたのは、新しい地域づくりをするところに対してはプロジェクト立ち上げ費用にお金を上げましょうと。それを第三者委員会が判定してお金の行き先を決めるというのですけれども、100町があったら100通り出てきて当たり前で、何でそれが1番、2番で、誰が決めるんだろうと。これ

はね、おかしいんじゃないかなと。よく郷土料理コンテストというのがあって、あれもどこが1番、2番っておかしいですね。皆1番に決まっているじゃないですか。地域づくりのプロジェクトも全部1番に決まっているのに、なぜそこに順位を付けるのか。こういうことに根元的に反発したいなと。今の話を聞いてもつくづく思うのですけれども。

さて、日置さん、これは今度地域の暮らしという点からみて、本当に分権改革に必要なものは何だろうかと、どうでしょう。

日置氏

一言で言うと、言い古された言葉ですが、本当の意味での協働が必要だなと思います。これは何年も前から、連携から始まり最近は協働という言葉がよく使われています。

それで大体何をするかというと、いつも会議をするんですね。皆集まって型通りの会議をして、連携協働と言ってしまふ。最近、地域ではいろんな分野でいろんな種類の会議が乱立してしまふ、蓋を明けてみるといつも同じ人が集まっているというのが、小さな町であればあるほど同じなのですが、そういう状態で、あれはやっぱり協働とは言わないし、無駄なエネルギーだなといつも思ってしまいます。じゃあ、何が本当の協働かというのは、私の経験からいくと、先ほど丸投げの話も出ましたけれども、私はむしろ丸投げは別いいんじゃないかなと。ひも付きよりはずっといいと思うんですね。委託事業という形で、行政の仕事の一端を自分達が担うと言うことはたくさんありますが、いろんなスタイルで、相手が違うとここまで委託の内容でやる仕事でも違うのかという場面にすごく遭遇します。うまくいったなとか、これは次につながりそうだと思う委託事業をやった時というのは、基本的にコミュニケーションが必ずあります。業務連絡ではなくコミュニケーションがあります。コミュニケーションの根元は何かと言うと、共有なんですね。この間コミュニケーションを専門でやっている方の研修を受けたら、コミュニケーションの原点は共有する、分かち合うことだという話を伺って、その通りだなと思いました。何かを一緒にやっていく時に、まず目的を共有しなければならぬ。ただ一緒にやるのではなくて、何のためにこれをやるのかというところをいかに共有できるか、その体験が今すごく地域には必要だなと思いますし、それを積み重ねることこそ分権改革の基礎になるのではないかと私は確信をしています。そういった協働をやる中で、やっぱり手応えを感じるんですね。私達もそうだし、市民もそうだし、市役所の方や道庁の方も、「これはすごくいい仕事をしたな」とか、「また一緒に仕事をしたいな」という手応えを強く感じるので、達成感と言うか、積み重ねがすごく大事なのかなと自分自身は思っています。

その時に、私は福祉の世界で仕事をしていますので、福祉の中でケアマネジメントという手法があるのですが、先ほどの青山先生の校歌の話ではないですけれども、発想はやっぱり転換をしていく必要があるという考えは、地方分権も福祉の世界でも共通する部分があります。これはケアマネジメントの言葉でリフレーミングと言うんですね。枠組みを変えてみようということなんですね。先ほどの校歌もマイナスのものをプラス発想していく。その強みのことをケアマネジメントの世界ではストレンクスと呼びます。地域の強みストレンクスをどういうところが特徴か、どういうところがいいところかというのを探していく作業が必要になると思うのですが、その時には実は弱いものだとかマイナスだと思われていたものの中に実は強みがあったりということは、リフレーミングの発想を

もってするとたくさんあったりするんです。また、ケアマネジメントの中では地域資源を上手に使える人が生き方が上手だという言い方をしますが、それもまさしくそのとおりで、もう一つは地域にあるもの全てが、目に見えるもの、目に見えないもの全てが社会資源であるという言い方もしますが、その発想も本当に地方分権の中にもそのまま取入れられるなど私は思っていて、それをいろんな関係者と一緒に地域のストレングスを見つけ、それをリフレミングの発想をもって考えていくということがこれから大事ではないかなと思っています。

青山氏

日置さん、具体的に、あれはうまくいったよなというのと、あれは失敗したなというのとケース、もし皆さんに紹介できるものがあれば。今のやつをもう少しブレイクダウンをした時に。

日置氏)

そうですね、市役所、ここに関係者がいないので安心して話せますが。地元で話をするとか利害の関係のある人がいて、ちょっと言いにくかったりしたりするのですけれども。

例えば、私達は子育て支援の仕事を市から委託を受けてやったのがあるんですよね。何年前に、家庭生活支援事業というのを市が考えてくれて委託を受けた事業があって、それは家事とか育児が非常に困難な、今の言葉で言うとネグレクトと呼ばれる虐待のご家庭を訪問して、家事とか育児をお手伝いするという仕事だったのですけれども、これは失敗例なんです、市役所の言いなりに仕事をしなくてはならない委託のされ方だったんですね。市役所の担当の方が「この家庭にこういうふうに行って下さい」と、言われたことを「はい」と聞いて行くというスタイルでした。本当はでもここは行かない方がいいんじゃないかなとか、もっとあっちに行った方がいいのではないかなということ言うんですけども、それは却下されて、市役所の、いってみるとその世帯を監視しに行く手先みたいな形で使われてしまって、2年半やったのですけれども、なかなかそこがうまくいわずに、結局経過措置の事業だったのですが、その後も地域でそういう仕事が必要だねという話になって、釧路市では国庫事業に振替えて残ったのですけれども、残ったときには別の社会福祉法人に委託先が替わっていたというような話がありました。その時、やっぱりこっちとしてももっと自分達としてもうまいやり方があったんじゃないかなと思ったのですけれども、そこにはコミュニケーションがなく、意思疎通がなかったなあと感じた例です。一方で、今、市の生活福祉事務所と一緒に自立支援事業をやっていますが、これも全く同じ市から委託を受けるスタイルです。これは釧路はすごく経済の状態が悪くて、生活保護の受給率が非常に全国的にも高いまちなんです、生活保護を受けている方達が少しでも自立できるように、それを手伝おうという事業なんです。この発想自体がまだ全国的には一般的ではなくて、今までは自立と言うと「頑張りなさい、頑張りなさい」と、「ハローワークに行って仕事を見つけなさい」と指導することが自立につながると信じて疑わなかった、あと監視をする。悪用をしないかどうか監視をするという福祉の枠組みだったので、そうすると当事者の方はただでも元気がないのに、そういうことを言われても出来ないから頼っているのに、ますます元気がなくて自立できないという悪循環だった

わけです。そこに釧路市は目を付けて、最初は国のモデル事業だったのですが、それを市役所自らがやるのではなくて民間の手助け、私達のようなNPOや地域のいろんな会社などに協力を得てやろうということになり、私達もその委託先の一つとしてやっています。働くことに直結するのではなくて、NPOの活動に参加することで生き甲斐を見つけていくとか、元気を少しでも養って行って、それが次のステップにつながるような取組みをしたのですが、これは最初から実はやることは決まっていなくて、何が出来るかというところから話し合いをしました。やっている年度の途中でも、こんなことなら次出来るんじゃないかとか、次はこうやったらいいんじゃないかと、年間の中でも、最初予定していた事業よりも3つも4つもメニューがどんどん増えて行って、今年は委託費がもうなくなったとか先日市役所が言ってきたくらいです。でも私達としてもお金が欲しくてやっていたわけではないので、逆に保護世帯の方が来て手伝ってくれるのがあるから、お金がなくても私達のところだけではなく他の関係機関も、委託費がなくても受入れて継続的にボランティアで来てもらえればいいという関係ができていますので、一緒に考えていくというのと市役所主導でやっていくのは全然違うなという実感ですね。

青山氏

なるほどね。やらされる仕事とやる仕事の違いと言うか、仕事というのは辛いじゃなくて楽しい、嬉しいという感じですかね。協働という言葉のところを自分でちゃんと意味づけしていくことはとても大事な気がしますよね。

秋田さん、すみません。また最後になってしまって申し訳ないのですけれども、秋田さんは全体から見て、少しまた違う観点でいいのですけれども、分権改革に本当に必要なものは何だというふうにお考えですか。

秋田氏

まさに今、分権改革というようにおっしゃいましたけれども、国においても改革という言葉を使っていますし、英訳でもディセントラリゼーション・リフォームということで改革という言葉を使っていますので、これは改革にふさわしい地方主義、分散主義への理念の転換がまず第一に必要なだと思っています。単に東京一極集中の弊害の是正ということであれば、それは改善・改良でいいわけですので、改革と言っている以上はその理念を転換することが必要だと思います。

その上で、理念だけではなくて、実際に地方主義、分散主義による我が国の社会経済構造の転換が必要ではないかと思っています。

先ほど堺屋太一さんのお話が出ましたけれども、堺屋さんのお話を聞いた時に、戦後の日本というのは役所だけではなくて、マスコミもそうですが、テレビ局でもキー局というのがありますし、それから企業でも本来はもっといろいろな地方に分散していた業界団体というものを全部東京に集めたと。本来は東京以外に大阪や名古屋や京都にも業界団体の本部はあっていいわけですが、それを全部東京に集めて、そうするとやはり主要企業のトップの人も東京に集まる。いろんな関係省庁ともやり取りができるよう東京に全部集中させた。そういうことの問題が残っていると思います。なかなかそれを一気に解決するということは難しいと思いますし、無理矢理企業を地方に分散するということは出来ませんけ

れども。

やはりその問題の影響としては、最近のホットなニュースで、大都市の法人事業税の地方への再配分という問題があります。これもやはり税源の偏在ということが根本にあって、その基というのは税を納める企業の偏在ということ。それがやはり今回の税制改正で浮き彫りになったのではないかと考えています。

ですから、先ほど青山さんがおっしゃいましたEUにおけるような補完性、近接性、そういうきちんとした理念というものをしっかり伝える努力をまずしなくてはいけないと思います。ただ、理念だけを言ってもなかなか都市住民の方は耳を傾けてくれませんので、北風と太陽という言葉もありますが、やはり地域の魅力、例えばわらび座のような拠点もそうですし、おいしい地酒というのもそうですけれども、そういった地域資源を巻き込んだ交流の機会を増やして、地方のファンになってもらう、サポーターになってもらうようなことをどんどん展開していくということも、理念を主張するだけでなく併せて必要なことではないかと思っております。

青山氏

それで、次なんですけれども、日置さんや久慈さんの話で市町村のイメージが少し浮かんできたのですが、じゃあ広域自治体の県、それから、言われているような道、北海道は道ですが、広域自治体の今後をどこに考えればいいのかという問題をまた別に考えてみたいのですが。問題提起とすれば、都道府県制というのは戦前から戦後にかけて知事が官選から民選に変わって自治体になったと一般に言われ、それはそうなんですけれども、私はどう考えても都道府県制というのは明治以来の集権国家の出先機関、手先機関という人もいますけれども、中央政府が自分達の考えてきたり立案した政策を日本中隅々に行き渡らせるために47の都道府県を使いながら浸透させてきたという性格があるんですね。それを支えてきたのは機関委任事務であり補助金であり各省からの出向人事、この3本柱でやってきた。これがやっぱり大きな転換期を迎えているような気がするんです。

じゃあ、広域自治体とは今後どういうふうを考えればいいのか。要らないんだと、中二階だから要らないんだという意見もあるでしょうし、こういう時こそ広域自治体が必要なんだという意見もあるかと思うんです。広域自治体の次の今後の姿という点から見て、どんな役割があるだろうかという話をしてみたいと思います。その辺の議論を始めていただけますか。

是永氏

私達は、劇団としては、先ほどちょっと申し上げました九州は一つということで、これは九州電力の鎌田会長にお手紙を書いて受け止めていただいて、九州観光推進機構スタート時点でミュージカル「天草市朗」を同機構の「共催作品」にさせていただき、全国各地で九州観光の広報もかねて上演しています。今年6月7日に仙台で東北観光推進機構がスタートしました。東北の場合はプラス新潟県で7県ですけれども、この間お世話になっているJR東海相談役の須田寛先生を中心にして中部広域観光推進協議会が9県、これは東京と大阪に挟まれた広域です。同協議会とも将来の作品計画で連携を考えています。

九州の場合は、これまでシンガポールや香港で、九州の各県ごとに観光物産展を開催し

ていたのですが、経済界のリーダーの鎌田会長が音頭を取って「観光」面で「九州はひとつ」を実現したわけです。

東北観光推進機構の第一弾キャンペーンは松尾芭蕉の「奥の細道」で、奇しくも私たち劇団は来年度と再来年度にミュージカル「おくのほそ道」を上演し、同機構「共催」にさせていただいております。松尾芭蕉はまさに県などなかった時代に、160日間、江戸・深川から大垣までの大旅行を門弟の曾良と一緒に実行しています「広域観光紀行」ですね。

韓国の皆さんは、東京にはしょっちゅうビジネスで来ているわけですがけれども、東京以外の「もう一つの日本」を「たざわこ芸術村」で体感される方々が多いです。東京以外にこんな面白い所があったのかという興味と関心と具体的・系統的な関係が永年続いているんですね。昔「玄界灘文化圏」があったように、国境もある面では超えてもいいんじゃないかと思っています。

青山氏

分かりました。県境というのを、実は暮らしの感覚からいくとほとんど意識しないですということ、特に首都圏だとか関西、近畿圏は特にそうなんですよね。県境で、単位で考えなければいけないことと、県境なんかいかにくだらないうものかというふうに考えなくてはいけないテーマと、はっきりステップを踏み分けることなんじゃないかなという気が私もする時があるのですが。

久慈さん、どうでしょうね、今度効率的な行政体系という点もあるかなと思うのですが、その辺からはどうでしょうか。

久慈氏

私達青年会議所としても、実は、私達は二戸市なんですけれども、広域4市町村からメンバーが入っておりまして、初めて見た方はカシオペア青年会議所って、なんじゃそりゃ、どこじゃそれと言われるのですが、これは実は十数年前から広域4市町村、旧5市町村なんですけれども、カシオペア広域連携推進をしようということいろいろな事業を連携してやってまいりまして、そういった中でそれこそ劇団をやったりいろいろやったんですけれども、それでやっぱり我々4市町村からメンバーが出ている青年会議所だからこそ二戸青年会議所ではなく、そのカシオペア構想の中の一環としてカシオペア青年会議所にしようということで21世紀になって名称を変更したんですね。その頃から広域連携がどんどん進んでおりまして、私達はカシオペア青年会議所なんです、青年会議所として今度は岩手ブロック協議会、青森ブロック協議会、秋田ブロック協議会って、47都道府県にまとまりがあるんです。岩手だったら13の青年会議所があって、青森だったら8つかな、青年会議所があると。そういうふうにブロックでまとめられて様々な会議をしたり事業をしたりしているのですが、それだけじゃないでしょうと、生活圏で考えれば我々は南部だと。南部という、ここ青森だとしゃべり辛いかもしれませんが南部衆だと。南部で八戸と二戸のカシオペア、鹿角と三沢と、この辺は生活圏がほぼ一緒だろうと。生きてきた文化も一緒だろうということで、八戸青年会議所を中心に久慈、カシオペア、三沢、十和田、鹿角、そういったところが集まって、青年会議所の組織体の中ではダメなんです、広域でやるのはよろしくない、正式には認められないのですけれども、南部衆という新たな枠

組みを作って 10 年前から活動をしております。いろんな事業を行ってやってきたのですが、そういった意味ではあまり県にこだわる必要は、境にこだわる必要はないのかなと。もっと生活が一緒のところでのやるのがいいのではないかなと考えております。

我々、道州制ということも突き詰めていくと、今、私は青森のここに車で二戸から何分かかったと思います？新幹線と特急で。1時間20分ちょいで来るんですね。1時間20分ちょいで来るということは仙台に行くのと同じくらいなんですね、新幹線で。全然遠くないんですよ。高速道路とか、このような新幹線が発達した時代において、距離というのは昔と比べたらどんどん縮まってきていると思うんです。そうなれば、今までは遠いように見えたところも意外と近かったりする。そういったメリットが増えてきたのだったら、今の壁は明治時代に作られた壁ですから、その壁をある程度見直すとまでは言えないけれども、もっともっと連携をしているんなことをやっていけばいいんじゃないかなと思います。

実際、僕は四国を指さして、香川はどこだとか指させないのと一緒で、関西の人が岩手はどこだと言っても、青森は絶対分かるんですね。岩手と秋田はどちらか分からなかったとか。山形と宮城がどこか分からなかったりとか。そういったところがあるので、もう北東北は日本人の心の故郷、パラダイスだというような意味でこの3県がまとまっていくというのは非常にいいことではないのかなと。グローバルな視点で見ても、岩手と言っても「うーん」と分からないけれども、「東北のこの辺だぞ」と「北のユートピアだ」と言うと、「すごいな」というイメージなんですね。

そういったイメージ的なこともありますし、後は、やっぱり申し訳ないけれど行政は小さい方がいいですね。小さな小さな行政の中で、より効果的なことをやっていくことが企業経営者としては当たり前の考えで、そういったことも踏まえて私は道州制というのは今すぐには進めていけない。ただこれも問題があって、住民が道州制と言ってもピンとこないですね。ここをどういうふうに分かち合うかということと、さっきも言ったとおり一緒になって考えていくとか、話し合っていく。知事とかが行ってくるま座対談とか言っても、そんなのは思うほど言えないんだから、住民は。だから、もっともっと身近な職員の方とか、いろんな方が一緒になって話をしていく機会が大事なのではないかなと思っております。

青山氏

私、沖縄で聞いたことがあるのですが、我々は道州制の区域を東京でよく話すと九州、沖縄って簡単に言いますよね。絶対違うんだと言うんですね。沖縄が考えるのはせいぜい奄美までだと。それを言葉で言い換えると、我らの地域って言える範囲でなければダメなんだと、こう言うんですね。沖縄の人達は、九州は違うと。

今、久慈さんが言われる我らの地域って考えられる気持ちと、実は県境というのは行政区域の問題でずれがあるんですね。

久慈氏

全くその通りですね。八戸と私達は言葉も同じ、食うものも同じ。本当に申し訳ないですけど津軽弁と南部弁と全然違うので、青森はよくやっているなと思うんですね。全然違う国同士が一つになっているから、これはすごいと思いますよ。

岩手も、今度は陸前高田とかに行くと全然違うんですよ。全然、北国二戸とかとは全然違うんですね。だから、行政区域の境というだけであって、大船渡とか陸前高田というのは盛岡を見ていませんから。皆仙台を見ていますから。皆そうなんです。そういうことを考えれば、我々はやっぱり一番近い大都市は八戸なんですね。次は盛岡なんですけれども、うちのお酒は八戸で全然売れないんですよ。本当。盛岡の千分の1くらいしか売れないんですよ。盛岡の方が圧倒的に売れる。これは実は粋の恩恵なんですね。岩手という粋の恩恵なんです。いくら南部だとか言っても八戸は桃川ですから。その辺が違うんですよ。

青山氏

分かりました。これは道州制という区画割りと今のお話は必ずしも同じでなくていいけれども、そういう道州制の区割りから考えていくと訳が分からないことになってしまうので、むしろそういう感覚からいった方がいいのかもしれないですね。

秋田さん、どうでしょう、道州制の構想もチラチラ出ていることもあって、秋田さんの方からはどんなふうにご覧になりますかね。これからの都道府県の姿。

秋田氏

まず道州制については、最終的にそれは目的ではなくて分権型社会の一つの姿だと思っていますので、机上で区割り論をするというのはまずおかしいと思っています。

よく資料として、東北圏全体の人口やGDPがヨーロッパだとスウェーデンと同じ程度だという話が出されるのですけれども、それを一つの励みにして頑張ろうと、プラスに捉えることはもちろんいいのですけれども、だからと言ってすぐその地域がスウェーデンという国のような一体感があって、あるいは付加価値を生み出す力を持っていると捉えるのはまたちょっと違うのかなと思っています。地域に富を生み出すきちんとした源泉があるのかどうか。先ほどちょっと触れましたように、現状は中央集権型の経済構造で成り立っていますので、青山さんからもお話がありましたように企業誘致でドンと来ても、それがいつまで存続するかという不安定な要素もありますので、やはり地域にしっかり根ざして、外の需要だけではなくてその地域のニーズにもちゃんと対応していて、かつ外の人にも必要とされる、そういう富を生み出す源泉というものを地域に作っていくということが大事なのではないかと思います。

あと、広域連携については是永さんがおっしゃったように、観光などの分野では、当然、旅行者起点で自然な形で連携をしていく。商品でもそうだと思います。それは全く当然だと思いますので、そこはどんどん進めていけばいいと思っています。

一方で、住民の立場で見た時に、じゃあ自分が帰属心とか一体感を持つ地域はどこなのかということは、これは同じ地域に住んでいても人によってかなり違いがあり、なかなか難しい問題だと思います。道州制についてはそんな考えを持っています。

次に、県や市町村がどういう役割をすればいいのかという部分ですけれども、これはやはり先ほど話があったニア・イズ・ベター、補完性、近接性の原理によって現場力、現場対応が強い市町村がまず対応して、しかも意志決定をしてもらう。よく自己決定、自己責任ということが声高に言われるのですけれども、あまりに責任、責任というのを最初に押し付けるのはどうかと思います。もちろん責任は取らなくてははいけないと思いますけれど

も。また、決定しても執行をする時にはいろんな効率的な執行体制というものがあると思いますので、意志決定をする県や市町村の区分が別だからと言って必ずしも執行も縦割りで分けるということにしないでよいと思います。意志決定自体はなるべく市町村なり住民に身近なところで行っても、実際に事業をやったりする執行体制というものは様々多様な進め方があるのではないかと基本的に考えております。

青山氏

意志決定できない自治体なんていうのは、自治体とは言えないんですよね。どんな小さな村であっても村のことを決めるのは村の人達なんですよ。だから、そういう意味で決定権を基礎自治体にやって、すると県はそれをサポートするということ？

秋田氏

サポートもありますし、やはり広域的に取り組まなければならない課題、例えば医師確保の問題とか、そういうものは必ずしも市町村だけで全て自己完結的にできるということではないので、県としてはそういう広域的なマネジメントなどを担う必要があると思います。それから先ほど申しました地方分権を進めるにあたっての理論武装、シンクタンクの部分というのはやはり県なり、あるいは県同士が連携をしたりして強力に進めていくべきだと思っています。

青山氏

日置さん、道州制とか都道府県制、これは統治構造と言うんですよ。でも、こんなことは住んでいる人にとってみれば、暮らしている人にとってみるとちゃんちゃらおかしいような話なんですよ。この道州制だとか都道府県制ということをもさに地域で活動されている日置さんから見れば、どんなふうにご覧になるかなと。

日置氏

多分、皆さんとちょっと違う立場というか、北海道は常に、県境と言ったらいいのかどうかわからないのですが、一つの北海道でいつも完結していて、今日も青森に来るというだけで、すごい異国に来たという感じが私はします。それだけある意味独自性が北海道にあります。住民の中にもそれは非常にたくさんあるんですね。

非常に広いということも、先ほど1時間20分であつたとお聞きしましたが、私は6時間かけて来ました。北海道の中でも私が函館に行こうとすると、1日2往復ぐらいある飛行機に乗ればすぐですが、普通だとJRで行くと8時間ぐらい掛かったりするわけですよ。空港自体が北海道内に9つあって、離島も入れるともっとたくさんあるわけです。

そんな地域で、じゃあ道の役割はというところを考えるのですが、今のところ、これから向かっていく方向性を考えた時には、市町村とか住民にとってはある意味皆になって欲しいなという期待はあります。今、国の流れだとか地方分権だとは言いながら、中央集権と同じ発想で地方分権だよと上から降りてくるような流れをそこでくい止めて欲しいという気持ちはすごくあって、そのためには、本当の地方分権とはこういうものだということを使い続けて欲しい、せめて言い続けて欲しいなと思っています。市町村がやっていくこ

とか、住民がやっていくことを、それでいいんだよと、その方向でいこうという精神的なバックアップが欲しいなというのは非常に、精神論的ですが、強くあります。

あと、それ以上に、そうなると精神論だけなら仕事はないんじゃないかとなってしまうので、どんな仕事を役割としてシフトしていったらいいかと考えたときには、やっぱりつなぐ役だったり、あと非常に地方分権を進める上ではマネジメント力というのがすごく大事になっていくと思うんですね。そういったものの手法や情報提供をしたりする役割は必要だと思います。後は雑用をやっていけばいいんじゃないかなと。地方ではできない部分をひたすら拾ってやっていく。私も普段市民活動をやってたり、いろんなネットワークの組織をやりますけれども、一番地味だけれども必要なのは雑用だったりするんですね。だから、その部分を中間の道なり県なりが担って行って、理想の姿に裏で、表に出ずに、イニシアチブを取らないスーパーバイザーみたいな形でやっていけたらいいなと、勝手な市民の立場から思います。

青山氏

そのやり方でいいんだよと言ってエンカレッジしてくれるというのはとても大事なことですよね。大抵都道府県庁の人は顔が東京の方に向いているので、それは間尺に合わないとか、法律解釈がこうなっていないとか、地方自治法などを読んできて違ふとかというのはダメで、まず最初に現場があり、現場の問題をどう解決するかというために法律解釈があり、この法律がおかしかったら変えればいいのかというぐらいの気持ちを持って欲しいということですね。

すいません、ちょっと時間を延長させて下さい。

最後、今お話になって大体浮かび上がっているテーマなんですけれども、やっぱり自分の町はこういう地域にするんだという強い意志とか情熱、それがなければこんな改革などはやらない方がいいし、やれって言われたってやれるものではないと思うので、一人2分くらいで申し訳ないのですけれども、我々の地域をこんな姿にしたい、これを2分ずつで言ってくれますか。日置さんから順番に。

日置氏

私は福祉の分野で仕事をして、自分も原点が自分が福祉を受ける側だったというところから始まっていますので、願っているのは一つだけで、どんな人でも大切にされる地域でありたいと思っています。今の状態だと弱い部分を持っている人はますます弱い立場に追いつめられていて、それをもうちょっと弱くない人達が頑張って支えているという状況なので、本当に地域そのものが一人ひとりを大切にすることを追求していくべきだなと思っています。

青山さんの一番最後にフランスの話が出ていましたけれども、全くその通りで、一人ひとりが役割を持つというのは私達の中で基礎にある考え方です、どんな重たい障害のある方でもその人がいることで何かもたらしめている役割というのがあります。私の子供もすごく重度の障害を持っていて、自分では自分のことは何も出来ないのですけれども、今ここにこうしているのもうちの長女がいたからここに私は来ているわけで、いろんな勇気ももらったし、いろんなきっかけももらったと思っています。それはでも障害のある長女だ

けではなくて他の子ども達もそうなんですけれども。

そういったように、どんな人でも一人ひとり社会の中の役割があるんですね。それを見殺しにするか、活かすかというのは地域次第だと私は思うので、これからは私のフィールドとしてはそこを追求しているんな人達と考えていきたいなと思っています。

そのためには言われた通りやるのではなく、私たちは「お仕着せの人生じゃなく自分らしく」とよく表現しますが、自分で考えていかに自分らしく生きていくかということだし、そのためにはうわべの支援ではなくてチャンスが欲しいし、自由が欲しいなと思います。

青山氏

ありがとうございます。

久慈さん。

久慈氏

我々、私の会社は100年以上続いている会社で、今はもちろん大事なんですけども、この先の未来にどうやって続いていって地域に大事にされていくかということが最も大事なテーマだと思ってやっております。今、今年の決算だけよければいい、今の売上げだけがいい、儲かればいいというふうに老舗が考えた時点で例の赤福さんとか船場吉兆さんというような問題が出てくるんだと思うんです。我々は大きなのれんをもらってその地域に必要とされ生きていくのであるならば、その先を生きていく未来の私の跡継ぎのため、もっと大きく言うと私の会社だけではなく、この町に住む子ども達がどれだけその町が好きになってもらえるかということを考えて生きていくべきだと思うんです。僕は自分の息子に、「お父さん、二戸好きだよ。二戸っていい町だね。」というふうに言わせるだけ。ただそれだけのためにこういった青年会議所の活動とかもしております。会社としても、「お父さん、すごいねお父さんの会社。お父さんのお酒が東京にもあったよ、ニューヨークにもあったよ、ロンドンにもあったよ。すごい。皆お父さんのことを知っていたよ。」というふうに言ってもらえるような、言えるような会社であるべきだと思っています。そのため未来を見据えて今を大事にし、そしてさらに先に進んでいくような一步一步をどういうふうに進んでいくかということを考えていかなくはいけないのではないかなと思っています。

そのためには、民間の企業だけでは何もありませんので、行政の皆さんと一緒にあって本当の意味の協働、そして一緒にあって考えて、一緒にあって酒を飲んで、一緒にあってこの町ってこうするべしという話をしていくことこそ地域にとって大事なのではないかなということをおっしゃるので、是非これからも、私も頑張っていきますけれども、一緒にやっていければなと思っています。

青山氏

是永さん、一言で言って何が。

是永氏

我々の夢は「人生の友としての劇団」でありたいし、「人生の友としての劇場」であり

たいということに尽きます。まだそこまで言っていませんが。社員の半分以上が地元の方々、ということと、劇団は56年ですけれども修学旅行を30年続けてきていまして、特にこの30年間で延べ総計36万人の都会の子ども達を秋田に受け入れて農作業体験研修旅行を続けてきたということの持つ意味。秋田、北東北から都会に向けて、都市・農村産地交流のみでなく、もっと発展させていきたいと思っています。

青山氏

ありがとうございました。
秋田さん、お願いします。

秋田氏

一言で言えば、各地域がそれぞれクリエイティブであるということをお願いしています。それはどういうことかと言うと、地域特性によって分野に違いはあっても、その地域にいる人がつくるものが、例えばまさに南部美人（酒名）やわらび座がそうだと思うのですが、地域を拠点とした価値が世界から広く認められること、そういう地域であるべきだと思っています。

ラブソングで、誰の歌か分からないのですけれども、ユア・マイ・ナンバー1というフレーズが記憶に残っています。皆にとってそうでなくても誰かにとってはその地域がナンバー1だということで、積極的にポジティブに選ばれる地域であること。そういう地域がどこかに偏ってなくて分散型になっていて、それが日本全体として多様な価値を生み出して、メイド・イン・ジャパンだけではなくてメイド・イン・アオモリとかメイド・イン・イワテといった地域ブランドの拠点が世界に向かって育っていく、そういう地域になればいいと思っています。

青山氏

ありがとうございます。

4人の方のお話を聞いて思い出したと言うか、さっき言い忘れてしまったのですが、これも今「限界集落」という言葉が盛んに流行語になってきている問題ですが、これは何なのかと分析をする時に、四つの空洞化があると言うんですよね。一つは、人口が流出して人が空洞化してしまった。それから農地の耕作放棄が増えてしまって土地が空洞化してしまった。それから集落がどんどん消えて、限界集落が空洞化。この三つの空洞化なんですけど、実は最も深刻なのは自分の地域に対する誇りの空洞化なのではないかと、こういう指摘がありましてね。実はこれを聞くと私もドキッとするんですよね。やはり自分達の住んでいる町に誇りを持つということが最終的な、全てのエネルギー源ではないのかなという感じがしています。

まとめにはなりませんけれども、多様な意見が様々飛び交うことが民主主義社会の一番いいところなので、トークセッションをここで閉じたいと思います。

どうもありがとうございました。

すいません、時間が少し超過していて申し訳ないのですが、もし会場からこの人に聞きたい、という御質問があれば手を挙げて、2人まで御質問を受けたいと思います。その場

合、どなたに聞きたい、私はどこどこ所属の何の誰だと、こういうことを言って下さいませるか。この機会なので、是非手を挙げていただけますでしょうか。

はい、どうぞ。

会場質問者

横浜町の杉山栄と申します。久慈さんにお伺いいたします。

資料の中に、親に関する学習のことが載っていました。私、昭和 55 年頃、国立の婦人会館で日本にもアメリカ式の親業講座が始められている県があって、青森県ではその点何もなく悲しく思いましたけれども、そういう親の学びをいつ頃から始められて、どんな様子でしょうか。お伺いしたいと思います。

久慈氏

青年会議所の活動の中で、私達は子どもに対するいろんな事業、スポーツ大会とか、そこには食育もありますけれども、いろんなイベントをやってきたのですけれども、いろいろやっていく中で、来年 2008 年の日本青年会議所の会頭が一番強く提唱しているのは、親が変われば子が変わる、子どもに変われ、変われと言っても変わらない。親が変わらなければ子どもは変わらないという強い信念がございまして、実は今年そのとっかかりをやっているのですが、来年青年会議所の日本の全体的な運動で親学ということを取り組んでいきます。ちなみに来年の日本青年会議所の会頭は 20 年間旅館業界のトップを走る石川の加賀屋の社長でございます。そういうところを考えて、今よりも実は来年の方がすごくこの親学というのを聞くとお思います。高橋四郎先生をこの間お呼びして講演をしていただきましたが、本当にすばしかったです。私も親です。5歳の長男と2歳の長女がいて、私は自分の事業にはあまり嫁を連れてこないのですけれども、「行きたい」というから「じゃあ、来い」と。保育ルームも全部完備させてやったのですけれども、すごく考えることがありました。私、すごく親を演じているんですね、ぶっちゃけ。親を演じています、子どもの前で。その演じているところはばれているよとか。本当に「ハア」と思うんですね。日本人として生まれたのであるならば、日本人のDNAに響くような太鼓とか、そういったものの教育はいいとか。とにかく一番大事なことは私達なんだよというところをすごく痛感するセミナーでございまして、皆さんも是非、ちょっと立ち戻って考える機会があれば考えてみてもらいたいのですが、来年以降の青年会議所の活動に期待して下さい。この親学というのをすごくやりますので。演じているんですよ。嫁の前でもすごくいい夫を演じますけれども。

青山氏

すいません、時間ということで。もう1人ぐらい、もしいれば。

会場質問者

日置さんにお伺いします。私は青森で不登校ひきこもりの支援をしています下山と申します。よろしくお願ひします。

ちょっとお尋ねしたいのですけれども、日置さんのやっている団体ではひきこもりに関

する子どもさんの支援及びサポートを行っているかということをお伺いしたいのです。と言うのは、障害を持っている方々の中には二次障害で不登校・ひきこもりになっているケースが非常に、半分以上を占めているというのが今の現状なので、そちら釧路の方でやられているのか、ちょっとお伺いします。

日置氏

おっしゃる通りで、全面的にやっていますとは言っていないのですけれども、障害のある方の相談とか支援の中でかなりそういう引きこもりや不登校を通じて紹介されてくる方というのはいるので、その延長線上で支援しているケースはたくさんあります。もともと地域生活支援ということで私達はやっているのですが、その中にはいろんな暮らしにくさというところで多くて、特に発達障害の方でその知的な遅れのないADHDだとか学習障害だとか、高機能の自閉症と呼ばれる方達が、不登校やひきこもりで浮上してくるケースや、あと精神障害、二次障害で大人になってから精神障害の分野で出てくるけれども、実は発達障害だったという人はたくさんいるんですね。だからそういう中で支援はしています。

青山氏

すいません、私の段取りの下手際で 20 分も超過してしまいました。誠に申し訳ございませんでした。これでトークセッションは終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司会者

ありがとうございました。

コーディネーターの青山様、及びパネリストの皆様、大変お疲れ様でございました。もう一度大きな拍手をお送り下さいませ。

これをもちまして、青森県地方分権推進シンポジウムを終了させていただきます。

皆様、長時間にわたりお付合いをいただきまして、本当にありがとうございました。